

2004年5月25日 ウォークス・ブックス New 13号

『福祉市民社会を創る〜コミュニケーションからコミュニティへ』

加藤春恵子著 新曜社 2004年3月 3780円

21世紀の日本社会を、どう創っていくか…著者が提唱するのは、「福祉市民社会」である。それは、大きな政府による公的福祉を基本にした「スウェーデン型福祉国家」でも、個人の自助努力に多くを負う「アメリカ型自助救済社会」でもない。「国家・自治体の公的セクターによる福祉サービスと、市民がNPOのワーカーあるいはボランティアとして有給・無給で働いてサービスを活性化させる非営利セクターをくみあわせることによって、福祉サービスを維持・発展させていく社会」のことであり、著者。本書で、9年間のフィールドワークをもとに抽出したノースケントン（ロンドン）での「福祉市民社会」の姿を提示する。

特に興味深いのは、「オープン・エイジ・プロジェクト」と呼ばれる高齢者ネットワークの活動。高齢者自身とコミュニティワーカーが主体的に作り出すコミュニティのあり方は、大いに参考になる。

そして、特筆すべきは、著者のフィールドワークのすばらしさであろう。9年をかけた参与観察やインタビューをもとにした報告と理論的考察を読むと、なるほどフィールドワークとはこうするものなのかと、改めて認識させられる。

今進行している（日本の）「改革」の方向性を考えるのに、きわめて有意義な材料を提供しているといえよう。（も）



『戦争が遺したもの—鶴見俊輔に戦後世代が聞く』

鶴見俊輔・上野千鶴子・小熊英二著
新曜社 2004年3月 2940円

「ああ、いい話を聞かせてもらった!」というのが実感。最近の世情に気分が暗くなっているみなさん、是非、お読みください。

鶴見俊輔を敬愛する、若き俊英・小熊英二、全共闘世代の論客・上野千鶴子が、大先輩の思想家の全てを無遠慮に洗いざらい聞き出した。二人の頼みに、「残り少ないボクの人生で3日間といえば、じゅうぶん長い時間です。さあ、何でも聞いてください。お答えしましょう」と鶴見。かくして、超ロング・インタビューが実現したのである。

身内のことから知識人たちの内幕まで、語り口は率直。夕食をとりながらのくだけた話も、貴重な逸話がぎっしり

で飽きさせない。生い立ちから、戦前のアメリカ生活、投獄体験、戦時下の捕虜虐待や、慰安所運営の話など、今まであまりふれられなかったテーマにも二人は鋭く突っ込む。安保、ベ平連、戦争責任、「転向」共同研究の話、丸山真男、桑原武夫、吉本隆明、小田実等々の友人や知人の興味深いエピソード…良質にして名コンビの聞き手を得て、一本筋を通して生きてきた知識人と、昭和史の細部があぶり出された。残念なのは、上野が迫るリブや女性の視点について、鶴見の理解は示されているが、話がかみ合っていない。それでも、読みごたえ充分であることには変わりはない一冊だ。

(な)

